

text=天辰保文

ト ム・ウェイツの評伝と言えば、同じ著者による『酔いどれ天使の唄』があって、それから15年が経つ。記述に重なった箇所があったりもするので、その続編か、もしくは改訂版かと思いつきながら読み進んだが、ちょっと待てよ、そうとばかりは言えないぞという思いが強まってきた。強いて言えば、現時点での完全版とも言うべきものではないかと。

酔いどれ天使と呼ばれ、ロック界でも類い希な存在感を放つウェイツの歩みを縦軸に、そこにかかわってきた人たち、例えばフランシス・コッポラ等を絡ませながら、物語を肉付けしていく。もう少し整理可能ではないかと思えるときもあるが、個々の話に独立した面白みがあるのでつい引き込まれる。

そしてなによりも素晴らしいのは、体温や体臭までもが伝わってくるくらいに、トム・ウェイツという人が生き生きと描かれている点だ。彼の発言が豊富に用意されたせいもあるが、彼の息遣いというか、インタビュアーに答える際の間の取りかたやユーモアのふりかた、その瞬間の様子さえもが見えてきそうな気がする。

こうやって本書を読んでみて改めて痛感するのは、シンガー、ソングライター、俳優など多彩な活動を通じて、トム・ウェイツという人が表現ということに真摯に向き合い、如何にこれまで果敢に挑戦してきたか、そのことだ。そして、この35年間は、彼にとってそのための闘いの歴史だった。自分自身との、音楽との、音楽にまつわる

表現と真摯に向き合い、

果敢な挑戦を続けてきた男の話



トム・ウェイツ  
素面の、酔いどれ天使

バトリック・ハンフリーズ 著／赤塚真人 訳  
東邦出版 ¥2,730

誘惑的な、しかし意味のない一連のものとの闘いだった。しかも彼は、他の人たちのように眉間に皺を寄せて、深刻ぶったりしないで、ユーモアをまぶしながら、ウィットで煙に巻きながら、パンチの切れ味だけは磨くことを怠らずに闘い続けてきた。そこがいまもむかしも、彼をトム・ウェイツならしめている理由だと思う。読み終えた後に、無性に彼の歌が聴きたくなった。それはつまり、優れた本だということだ、少なくともぼくにとっては。

## 魂のゆくえ

ビーター・バラカン 著  
アルテスパブリッシング ¥1,890



## リマスター盤の如く蘇った改訂ヴァージョン

89年刊行の名著が大幅に改訂されて復活した。もともと語り下ろしという形で執筆されたこともあってか、文体はより柔らかく口語的に修正され、テレビやラジオで耳にする「いつものビーターさん」の語り口を連想させるものに。今ではさほど重要でなくなったアーティスト(たとえばホイットニー・ヒューストン)の記述は減り、より今日の話題が追加されている。CDガイドのセクションでは、最近のエイミー・ワインハウスあたりまでフォローしつつ、旧版でも掲載され

ていたアーティストは現在入手可能な最良のタイトルに差し替えられている。ソウル・ミュージックのガイド本という体をとりながら、リアルタイム・リスナーならではの貴重な視点による回顧録とも言える本書は、ソウル・ミュージック入門志願者だけでなくマニアまでを唸らせる説得力に満ちている。名盤がリマスターによって時代に相応しい形で蘇るように、優れた音楽書も時とともにアップデートされるべきだと改めて思われる。(伊藤隆剛)

## 「at 武道館」をつかった男 ディレクター・野中と洋楽ロック黄金時代

和久井光司 著  
アルテスパブリッシング ¥1,680



## “日本洋楽”の歴史を紐解くオールド・ロック・ファン必読の書

タイトルの「at 武道館」とは、本誌も前号で取り上げたチープ・トリックの代名詞的ライブ盤のこと。本書は“日本洋楽”の全盛期を背景に、世界的ヒット作「at 武道館」を生んだディレクター、野中規雄がソニー・ミュージック・ダイレクトの社長として定年退職を迎えるまでを綴っている。そのチープ・トリックだけでなくクラッシュの伝説的シングル・ボックスの企画立案者であり、エアロスミス『Walk This Way』に「お説教」という迷邦題を付けた張本人であり(笑)、クラッ

シュと同時期にフリオ・イグレシアスを担当していたというこの人のキャリアは、それだけで充分に興味深い。加えて著者の和久井光司氏による丹念な取材に基づいた正確な背景描写と“日本洋楽”への幅広い知識が、本書のエピソードのひとつひとつをいっそう引き立てている。日本ではこれまでなかった“裏方から見たロック・ヒストリー”であり、団塊世代のある種理想的なサクセス・ストーリーとしても清々しい読後感を誘う。(伊藤隆剛)